

---

# きどうせんしがんだむだぶるおー～続編はりりなのへ～

MS少女っていいよね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きどつせんしがんだむだぶるおーく続編はりりなのへく

### 【Nコード】

N2558BA

### 【作者名】

MS少女っていいよね

### 【あらすじ】

俺がある日目を覚ますと……ガンダム00の世界？

(前書き)

何か気になった所やこれおかしいんじゃないか?といった点がありましたら質問などお願いします

人生というのは何が起きるか分からない。

突然義理の兄弟姉妹が出来るかもしれない。交通事故に会うかも知れない。宝くじで1億当てるかもしれない。はたまた場外ホームランの野球玉が頭に当たるかもしれない。

確率としては決してすべて無いなんてことはない。「あり得ないなんてあり得ない」のようなことを誰かが言っていたはずだ。

……ただこれはあんまりだと思っ。

ある日目を覚ましたら別の世界に居た。

いや、別に妄想だとかそういうわけじゃなくて本当にそうなんだって。ある日まで西暦2011年だったはずなのに、突然西暦2307年、つまり未来にいたんだから。

それだけなら未来にタイムスリップとか思ったんだけど、『軌道工レベーター』『ユニオン』『AEU』『人革連』なんて名前が出てきたときには驚いた。

だってそれらの名前は、『機動戦士ガンダム00』というアニメに出てくる名前なんだから。

さらにどういう事かは分からないけど俺の名前は刹那『F』セイエイだった。まあ本名はソラン『イブラヒム』なんだがそれは今は関係ないだろう。

最終的には生き残れるとはいえ、一期の最後ではCBは実質的な壊滅、更にロックオンやリヒティ、クリスマスまで失うのだ。

このままでは原作同様になってしまふ。そこで俺はまず必死にモビルスーツの訓練をし、肉体を徹底的に鍛え、シミュレーションの難易度を最高難易度以上にして強敵に備えるなどして生き残るために頑張った。俺超頑張った。

だからといって、あまり逸脱した行為をしてあるべき歴史（原作）を完全に壊すような真似をすれば、本来解決できるはずだったものも解決しないかもしれないので、ある程度は原作通りにいくよう行動し、最後の決戦には早く宇宙に上がればいいと思っていた。

そして俺が初めてエクシアに乗ることになったその日に衝撃的な事実が発覚したのだった……

『ハアハア、これが待ちに待った私のマイスターですか？超かっこ可愛いじゃないですか！！』

え？テイエリア？そんな人知りませんね。勝手にロックオンとBLしててください。アレルヤ？そんな人居ましたっけ？』

『私達の話が聞こえないからって好き放題言うね君は……………』

『つか俺のマイスターをBLにするのは止める』

『僕のマイスターを忘れないてくださいよ！』

……………  
……？

『いいじゃないですか、別に聞こえないんですし。オリジナルの太

陽炉には意識と自我があるなんて開発者であるあのジジイでも予測していなかったんですからね。

あとアレルヤに関しては諦めてください』

『確かにそうだろうけど……もし聞かえていたらどうするつもりなんだい？

あとアレルヤに関しては諦めるんだ』

『さすがに聞こえるやつは居ないだろ。まさか俺達太陽炉が話しているとは夢にも思わないだろうし。

あとアレルヤに関しては諦める』

『皆して僕のマイスターに対して酷くない!?!?』

『『『酷くない』』』

『うわーん、泣いてやるうう!?!』

『あーもう、五月蠅いですねー。あ、私のマイスターがこっちに近づいてきましたよ!』

俺は話していたであろうエクシアに近づいて……触ってみる。

つるつるとしたボディだ普通にMSだろう。

次にコックピットも見てみる。

アニメで見たことのあるようなデザインのコックピットだった。

『ああ、見られてる!私を凝視してますよ!』

うん言いたいことは……分かるよね？

「え、MSが喋ってるうううううう！？」

『 『 『 『 『 ……え？ 『 『 『 『 『 』

なんでぞ。

そう、俺はなぜかMSの音が聞こえたのだ。いや、正確に  
言うとMSではなく『太陽炉同士の会話が聞こえる』と言っべきか。

当時の太陽炉を積んだMS全機からは『こいつ本当に人間か？』と

言われたりした。だが俺は刹那に憑依した存在だし何かおかしいことが起こっても不思議じゃないと思ったのだ。

さらに俺は俺が刹那であって刹那で無い存在であることも太陽炉達に明かした。

この事を言つと太陽炉達は『ああ、やっぱり人間じゃなかったのか』とか言つて納得しました。そんなことで納得しないでよ……。

そして時は過ぎ、アニメで言う第一話のAEUの公開軍事演習に武力介入することになり、そこから俺の戦いは始まった。それからほとんど拍子に話が進んで行きグラハムと戦つたりティエリアが切れたりチームトリニティと戦つてネーナにキスされたりリヒティがクリスが振り向いてくれないと落ち込んだりひろしと戦つたり……まあなんだ、すごく大変だったってことだ。

そして俺が原作と違う展開にした第二十二話、チームトリニティのミハエルが殺されガンダムスローネドライがひろしの手に渡ってしまい、チームリーダーであるヨハンも殺されてしまったあの話だ。

元々俺はあの子のネーナを何故CBが保護しなかったのか疑問であった。この頃のCBは超戦力不足状態な上にロックオンは負傷、テイエリアは精神的に色々ダメになっていたのに新たな戦力になりうるネーナを保護しなかったのか、だ。

アニメを見ているだけの俺には伝わってこなかったが確かにトリニティの暴走によってガンダムに向けられた憎悪は凄まじかった。だがそれを余り補って戦力の確保、というのは重要な事である。……それと俺自身釘宮さんの声好きだったし。

原作通りにエクシアがトランザムを発動、その時のエクシアのテンションは凄かった。

『ふはははは！！！似非ガンダム！！お前に足りないもの、それは！！情熱思想理想思考気品優雅さ勤勉さ！  
そして何より

速さが足りない！』

と圧倒的なスピードとパワーでサーシエスの駆るスローネツヴァイ

を撃退、その後撤退しようとするネーナに声を掛けた。

……あとエクシア、君はなんでそのネタを知っているんだい？

「ネーナ＝トリニティ」

「何よ！」

「……すまなかった」

「はあ？なんでアンタが私に誤ってるのよ！」

「同じガンダムマイスターであるお前の兄達を助けられなかったから、だ」

「あれは私達の力が足りなかったのよ……そのせいでヨハン兄とミハ兄が死んじゃったんだ……！」

「マイスター同士の争いがあったからこそこうなった。俺にも責任

「はある」

「……そういえばアンタはあんまり私達と戦うのに積極的じゃなかったわね」

「ああ、お前たちのリーダーであるヨハンも言っていたが俺たちは志を同じくするマイスターだ。お前たちが無差別な破壊をしようともな……」

「あ、あれは無差別なんかじゃ……」

「だがあのパーティー会場には武力介入するような人物やMSは無かったはずだ」

「う……あれは私が気晴らしにやっただけよ」

「やはり武力介入では無かったのか。あのような事をされると俺達CBにまで影響が出てくる」

「え……?」

「CBは元々いい目では見られていない、無差別的な攻撃をするガンダムがいると言うだけで俺たちに対する反抗意識は強まる」

「だけどそれだけでしょ?」

「だが今は疑似太陽炉搭載型のMSが大量に開発されている、この太陽炉の出所はお前達に指示を出している人物のはずだ。そして初期の疑似太陽炉を持ったお前達を殺そうとしたのもおそらくは指示を出していた人物のはずだ」

「あいつ……私達を駒扱いしてたの!？」

「恐らくな、そしてお前達が『無差別的な攻撃をするガンダム』と言っ事実を作りだしたためにその原因であるトリニティを殺し、同じガンダムタイプを保有するCBにその憎しみを押しつけようとしている」

「そんな……なら私達がやった意味はなんだったのよ……」

「ただの破壊でしかなかった、ということだ。

話は変わるが俺達（CB）に出来ないか？」

「な、いきなりどうして!私達はあんた達と戦闘もしたのよ!？」

「ガンダムは戦争をなくすための存在だ、その存在が騙されて（・・・）悪用されていたんだ。そのマイスターを保護するのもCBの役目だ。」

「あ、ありがとう刹那……」

と、言った具合だ。

……最後だけ簡単に納得してくれたけどよかったんだらうか？

ちなみに俺はこのあとラッセに「よかったのか？」と言われたが「きつとティエリアが反発してくるだろっ」と返した。

その後トレミーへ、スローネツヴァイがアリー「アル」サーシエスに奪取されてしまったことネーナ「トリニティ」を保護したことそしてネーナ「トリニティ」をこのままトレミーへ連れていくこと俺もすぐに宇宙に上がること等を暗号通信にして送りエクシアと強襲用コンテナをドッキングさせスローネはコンテナに掴まってもらったことにした。

そして無事に大気圏を突破した、だが俺はその時には気が気ではなかった。

何故なら原作通りならもうすでにロックオンはボロボロ、デュナメスも戦闘を行えるような状態ではないはずだったからだ。

俺はすぐにコンテナとのドッキングを解除、トランザムで目標ポイントへ向かった。

「いくぞエクシア」

『オーケーですよマイスター！』

『トランザム！！』

エクシアが赤く光り、いままでの3倍のスピードで宇宙を駆ける。  
間に合ってくれよ……！！

『この程度の損傷……！！どつってことないわー！！』

……デユナメスの雄たけびが聞こえてきた。

その方向を見るとなんとまだデユナメスが戦っていたのだ、正直機  
械が根性論で生き残ってるとかありえないけどロックオンが生きて  
いるのは分かる！！

「ロックオン！！」

「刹那か！？頼もしい援軍だ！！」

ここでサーシエスを取り逃がせば5年後の二期でも大きな壁になる、今ここで討たせてもらうぞ……アリー！！アル！！サーシエス！！

とはいってもデュナメスの装備はGNビームサーベルが一本とGNビームピストルが二丁だけ、腕も片方は無くなっていた。

「ロックオン、さきにトレミーへ戻っておいてくれないか？」

「何言ってるんだ刹那！こいつは俺の両親の敵……！！そいつを目の前に見逃せって言うのか！！」

「だがもう戦闘続行は不可能だろう」

「ぐっ！けどなあ！！」

「分かった、だが無理はしないでくれ。俺がやつの気を反らすその隙に狙い撃ってくれ」

「了解だ、だが俺に今狙い撃てるだけの力はねえ。だからしばらく耐えてくれ！！」

そう言っただけでロックオンはスローネツヴァイの前から離脱した。

おそらく原作でも使用したGNアームズの残骸を使いつもりだろう、だが今回は生身じゃない。きっと原作のように爆発に巻き込まれて死んだりはないだろう。

「いくぞ、アリー!!アル!!サーシエス!!」

俺は自分の掛け声と共にサーシエスに向かって切りかかった。その一撃は容易くかわされた、だがそれは俺にも分かっていたこと。本命はこつちだ!!

「いけえ!!」

俺はもう一方に持っていたGNビームサーベルを投擲した。

だがその攻撃もかわされてしまった。それでも当たってくれないか……!!

すぐさまローネからの反撃が来たため左腕のGNシールドでガード……したらシールドがぶっ壊れた!?おいおい、なんで一発で壊れてるんだよ!俺は無印ガンガンやってんじゃねーんだぞ!!

泣く泣く俺の間合いから離脱。

一回でも離脱したらなかなか攻められない。それに相手と俺の技量が違いすぎる……!!

だが、こんなところじゃ死ねないんだよ!!

そこからは怒涛の回避&射撃戦、悔しいが相手のほうが射撃の腕も一枚上手だ。

射撃戦が始まってから数分経っただろう、こちらは腕と右足の部分にダメージを負ったのに相手の受けている損傷は無い、トランザムも粒子の再チャージまで使用不可。これ以上は無理か……

『どけ、刹那!!』

ツ!! ロックオンか!!

『了解!!』

すぐさまおれは射線から離れる、するとそのコンマ数秒後にはスロ―ネはピンク色の粒子ビームに吞まれていた。

「ハハハ……やったぜ、母さん、父さん、エイミィ……敵を……討つたぜ……」

GNアームズから撃ったビームだから流石に生きていないだろう。しかも今回は半分当たっただけじゃなく直撃、これで生きていたらマジで人間じゃないからな……

「帰ろう、ロックオン。俺達の帰るべき場所へ」

「そうだな……刹那」

そうして俺達は帰るべき場所  
プトレマイオス  
に帰ったのだ  
った

帰った後はまずロックオンが俺以外のクル 全員に怒られた。  
フェルトは泣いて、スメラギさんはイアンと共に激怒、リヒティも  
クリスと一緒に怒っていた。アレルヤはこれからは無理しないでね、  
とか言っていた。ティエリアは何か言いたげにしていたが何も言わず  
に悲しそうな目でロックオンを見ていた。ラッセは兄貴分なんだか  
ら死ぬなよ、と言っていた。ネーナも仲間になったばかりだが私  
が味方になった途端死んだりしてたら承知しないわよ！と言ってい  
た。

当然だが俺も怒った。付き合いは俺が憑依してからだから一年程度  
だが俺が迷っているときは助言してくれたり、俺が困っているとき

は助けてくれた兄貴分なんだ。

だが俺は原作を大きくかえることができた……ネーナトリニティを仲間に引き入れ、ロツクオン（ニール）を生存させて一期の最終決戦に臨むことができる。これだけの戦力があればそうそう簡単には負けないだろう。そう思っていた。そう、思って”いた”んだ

……

最終決戦、俺はGNアームズとドッキングし GNアーマータYP E・Eとなりアレハンドロの駆るアルヴァトーレと激突し苦しいながらも勝利した。しかしラッセの乗っていたGNアームズはどこに居るか分からず通信を試してみても応答がなかった。

すると倒したはずのアルヴァトーレの中から金色のMSが出てきた。そういえば中にはアルヴァアロン

が格納されてるんだったか、時間が少し経っているから忘れていた。すぐに長砲身型のGNビームライフルをこちらに向けて撃ってきた……が、俺はトランザムを使用し攻撃を回避。すぐにGNソードライフルを発射したがGNフィールドに阻まれた。

だが俺は知っているGNフィールドは実体剣を防げないことを、だ

から俺はGNソードでGNフィールドを切り裂き、GNロングブレード、ショートブレードを突き立て、さらにビームサーベルで斬りつけた。これがセブンスソードアタックだっ！！

かっこつけてコックピットの中で決めポーズをとっているとレーダーに高速に接近してくる機体が一機。なんだこいつ……ハア！？フラッグ？しかも擬似太陽炉搭載型……まさか！！

「会いたかった、会いたかったぞ！ガンダム！」

久しぶりだな変態乙女座、俺は会いたくなかったぞ。武器もあとハGNソードしか無いし。

「ハワードとダリルの仇、討たせてもらうぞ！このGNフラッグで！」

「なっ！？通信が！！！」

これじゃ顔ばれするじゃねえか！！

「なんと！あの子の少年か！やはり私と君は運命の赤い糸で結ばれていたようだ。そうだ、戦う運命にあった！」

ええい！原作と同じことを……！！

「ようやく理解した。君の圧倒的な性能に私は心奪われた。この気

持ち、まさしく愛だ!!」

「あ、愛!?!」

直接話してもコイツの理論はわかんねー

、しかも今は斬りあってるんだぜ?

それからうだうだ乙女座の超理論を聞いていると……あ、左腕斬り落とされた。ヤバイ、非常にヤバイ。ここまで原作をハッピー(?)な形に持ってきてるのに俺だけここで死ぬなんて……

「ここで終ってたまるかあああ!!!」

「その威勢よし、だが!!」

俺の一撃はコックピットのわずか横を貫通、乙女座の攻撃も俺のコックピットのすぐ横を貫通。

「ハワード、ダリル…敵は……」

「くそぉ……」

俺はエクシアと共に落ちていく……どこかはわからないが落ちていく……これがロックオンを救った代償だとも言うのか……? だが後悔はしない、短い間だったが大切な仲間の命を救えたんだ。後悔なんてあるはずがない。ふと、急に眠たくなってきた。出来れば劇場版まで生きたかったな……。さようなら。俺のガンダム(相棒)……



(後書き)

正直行って作者の自己満。

刹那に憑依 りりなのがやってみただけです。しかもりりなのはまだ書いてないって言うね……気が向いたら書きます、多分。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2558ba/>

---

きどうせんしがんだむだぶるおー～続編はりりなのへ～

2012年1月6日16時53分発行